土地に刻まれた物語 history
——十七世紀オランダ風景画に見えるもの

小林　頼子（目白大学）

自然への関心、自然に遊ぶ喜び、田園的な暮らしへの憧れ——その絵画化こそが風景画だと私たちは無意識のうちに思い込んでいないだろうか。しかし、風景は、見る者が〈見える〉ものとして捉えた瞬間から、一定の視角で切り取られた、一定の世界観の表れとなる。風景画は、社会的・文化的な負荷にかかった「見る行為」の痕跡である以上、いかに写実的に見えようとも、それを注文する者・制作する者、購入する者・享受する者が身に帯びたイデオロギーの担い手にならざるを得ない。

そこで、風景画、なかでも西洋絵画史上、いち早く独立したジャンルとして風景画に取り組んだ十七世紀オランダに注目し、その地で制作された風景画に刻まれた物語を手掛かりにして、〈見える〉ことが抱え込む複雑な諸相を浮き彫りにしようと試みた。

発表では、海景、都市、小麦畑を描いた風景画を取り上げ、それら作品の作者が、眼前に広がる果てしない風景の中から、意識的か否かは別にして、いかなる意図で、何に目を向け、どこをいかに切り取り、いかに作品化したかを検討した。その結果、どの風景画にも、十六世紀末に生まれた新興国・オランダ共和国の市民であることのアイデンティティの意識、自ら獲得した都市・国土への愛着の想い、その国を支える経済力を誇りとする意識が共通して刻み込まれていることが明らかとなった。

オランダには、「オランダの庭」というきわめて特徴的な画像の伝統がある。庭に見立てられたオランダ共和国は、周りを外敵の侵入を防ぐ柳の編み垣で囲み、中央に守護動物・「オランダのライオン」あるいは守護神「オランダの乙女」を侍らせる。緑なす美しい庭は、守るべき国土を表わし、愛国心の象徴としての機能を担う。十七世紀オランダ風景画の多くは、この「オランダの庭」を支える愛国心と同じ視角で捉えられていた可能性がある。風景画は、一定の風景を〈見える〉ものにする人間の世界理解なくして成立しないのだ。

目白大学社会学部メディア表現学科教授。慶應義塾大学文学研究科（修士）。目白大学准教授を経て現職。二〇〇〇年、第十回吉田秀和賞受賞。二〇〇九年九月～二〇一〇年一月、オランダ王立人文学社会科学高等研究所訪問研究員。専門は十七世紀オランダ美術史、江戸期の日蘭美術交流史。主著に『改訂新版フェルメール論』（二〇〇六年、八坂書房）、『フェルメール全作品集』（小学館、二〇一二年）、『庭園のコスモロジー』（青土社、二〇一四）など。